

令和3年度 学校経営計画

☆杉並区の教育ビジョン2012

(今後10年を見据えた杉並の目指す教育)

共に学び共に支え共に創る杉並の教育

(目指す人間像)

- 夢に向かい、志をもって、自らの道を拓く人
- 「かかわり」を大切にし、地域・社会・自然と共に生きる人

(育みたい力)

- 1 自分の持ち味を見つけ、自ら学び、考え、判断し、行動できる力
- 2 変化の時代をとらえ、たくましく生きる心と体の力
- 3 豊かな感性をもち、感動を分かちあう力
- 4 他者の存在を認め、多様な関係を結ぶ力
- 5 持続可能な社会を目指し、次代を共に支えていく力

杉並区の教育ビジョンに掲げられた「目指す人間像」は、一人の人間としてよりよい生き方を求めていくことを目指すとともに、自分以外の人たちとのかかわりや、もの、こととのかかわりの中で豊かな人生を歩もうとする人に育てていくことを意味している。これを受け、本校教育活動を通して具体的に目指す児童像として

○自分で考え、自分で判断し、自分から行動して自らを高める子供（自立）

○友達と協力したり協働したりして、共に成長できる子供（共生）

を掲げ、「自立と共生」を本校学校経営の中核の理念に据える。

1. 教育目標

やさしく かしく たくましく

やさしく (思いやりの心をもち、仲間と協力し合う子ども)

かしく (自ら学び、自ら考え、主体的に行動する子ども)

たくましく (心と体の健康に気を付け、すすんできたえる子ども)

今年度も「たくましく」を重点目標にする。子供たちの心身のたくましさを高めることに重きを置いた教育活動を展開し、全教育活動を通して具体的な指導を工夫しながらすすめて、毎日の学校生活を健全に送れるたくましい心身を身につけるようにしていく。そして、子供たちのたくましさの変容を見取り、指導と評価を繰り返しながら、たくましさの変容を子供自身に実感させるようにする。

また、他の2つの教育目標についても教育活動全体を通して具現化するように努め、知・徳・体のバランスのとれた育ちを求めていくことにし、子供自らが成長を自覚するとともに、自分を好きになり自分に自信をもつ子供を育てる。

2. 学校経営の基本方針

☆子供たちの主体的な活動を導き出す学校

教育は、「教える」と「育てる」ことから成り立つ。教師が「教える」ことはとても大切だが、子供たちが生きる力を身につけていくためには「育てる」ことはより重要であると考えます。子供自身が考え、判断し、行動し、数々の成功体験を積み重ねたり、間違いや失敗からの学びを得たりして、将来に役立つ真の学びを獲得する機会を創出する。子供自身にボールをもたせ、子供の発想や子供の思い願いを尊重して、子供の力で学校生活を進めていく学校を創る。子供自らがすすんで活動するために、教職員・保護者・地域の大人が子供たちとのかかわり方を考え、主体性を導き出すための指導を工夫し、実践する学校にしていく。

☆よい集団の中でよい個（子）を育てる学校

学校生活は、同年齢の子供たちが30人以上集まって学習や生活を送る特性がある。「集団生活を通して子供を育てる」という学校の最大の特性を生かし、学級をどのようにまとまりのある集団にするかは教師に課せられた大きな仕事と認識していく。また、学級だけでなく学校行事、学年活動、専科授業、習熟度別グループ、ボールゲームのチーム、掃除当番など、様々な活動における集団がある。子供が所属する集団とのかかわりを深くし、集団の凝集性が高まるように指導を工夫改善して、子供たち一人一人への集団からの力を及ばせて個（子）を育てる学校にする。

☆子供たちにとって、楽しい学校

自らを高めるために学ぶ楽しさ、自分の考えや思いをすすんで表現していく楽しさ、多くの人とかかわったり一緒に協力したりする楽しさ、苦勞して事を成し遂げていく楽しさなど、子供の心を真に満たす楽しさを味わえる学校を創る。1年生と6年生では、感じる楽しさの質やレベルは異なる。発達段階や生活体験の違いを踏まえ、味わわせたい楽しさを様々なイメージしながら、子供たち一人一人の様子を見取り、すべての子供がいろいろな楽しさを味わう小学校生活を実現していく。

☆全教職員で全校の子供たちの教育をすすめる学校

教職員が「チーム桃五」として全校の子供たちの教育に当たる。子供たち一人一人を大事にする教育は、子供全員の顔と名前が一致することに始まり、個々の子供の変容していく様子について全教職員が共有できている中で実現していく。職員がすべての子供たちのことを共通理解するように努め、病人の情報を医師や看護師が確実に共有しているナースステーションのような協働していく教職員組織とする。職員室、事務室、主事室、給食室みんなで桃五の子供たちを育てていく学校をめざす。

☆多くの大人の力を借りて、子供を育てる学校

保護者・地域などの多くの大人の力を借りて、学校内で完結する教育ではなく、広く深く地域力を活用して質の高い教育を実現していく。学校の最大の理解者である学校運営協議会(CS委員会)、子供たちの活動を支える実働部隊としての支援本部、様々な役割を担い学校を支えるPTAなど多くの方々に協力を依頼し、学校と保護者・地域との強い信頼関係の下で教育をすすめる。

☆自分の持ち味を存分に発揮し、教育に携わることに喜びを感じている教師集団が導く学校

子供を育てるという楽しい営みに深くかかわれるのが教師という職である。子供一人一人がみな違うように、教職員も自分らしさを生かして子供たちの教育に当たる毎日としていきたい。そして、桃五に集った縁を大切にして互いに切磋琢磨し、教師としての手腕力量を向上させ、子供たちにとっての「いい先生」になるためにさらなる進化を図る一年にする。

3. 基本方針の具体化

I. 学力の向上に関して

- ・子供の深い学びを促すために、子供自身のOUTPUTの場を大切にした授業を展開する。児童が学んだ知識・技能等を自身の頭で再構築し、口頭発表や文章表現等で考えや思いを表出していく時間が豊かな授業を展開する。
- ・校内研究「たくましく関わる力を育てる指導法の工夫 ～国語科の対話的学びを通して～」において、国語科を窓口にした授業研究を進める。対話的学びを追究し、その成果をすべての教科領域に還元する。校内研究の場を通して、桃五教員集団の指導力を高める。
- ・子供の知的好奇心を揺さぶり、「自ら考える」「自ら試す」「自ら調べる」など、子供自身の活動を中心とした学習を構築する。特に、目標設定を子供自らが行ったり、課題解決の方法を子供が選択したりする学びの構造改革を踏まえた授業づくりをすすめる。そして、自ら課題解決に向けて探求する態度を育てるとともに、質の高い学びを通して学力の向上を図る。
- ・学力の定着に時間がかかったり、つまずいたりしている児童に対して、土曜並びに木曜日の放課後補習時間を活用し個別指導にあたりるとともに、朝のパワーアップタイムを確実に実施することで基礎的基本的学力の定着を図る。
- ・一人一台のタブレットを活用した授業を積極的に行い、新たな指導の仕方を教師自らが挑むとともに、子供たちの学び方を豊かにし確かな学力向上につなげていく。
- ・児童の考える力を高めていくために、教師は待つ指導を心がけると共に、授業における教師の話す時間の短縮を常に意識する。教室に児童の声が行き交う主体的かつ活動量の豊かな授業をめざす。

II. 生活力の向上に関して

- ・目標やめあてを絵に描いた餅にしない。具体的かつ実現可能な目標やめあてを子供自身で立てられる力をつけるとともに、自らを高めていく楽しさや喜びを感じとれる日常を創る。子供自身が成長を実感するように、目標やめあてをたてて実践し振り返る活動を繰り返す学校生活にしていく。
- ・気持ちのよいあいさつや言葉遣い、思いやりの気持ちを基底にした言動によって、他者との良好な人間関係を築かせる。また、子供が教師を頼りにしていくよう、「対治と同治」の両面を使い分けて、子供に寄り添った指導を常に心がける。
- ・学校や学級のためなど、他者に進んで貢献できるようにし、所属する集団の一員として友達のよさや友達との違いを認め合う意識を育てる。
- ・楽しい学校生活の前提として安全な生活が実現するように、教職員・PTA等の大人が安全への意識を強くもち、安全点検や施設の改善に常に努める。同時に、子供自身が安全な生活ができる力を身に付けていけるように、発達段階に応じた指導をすすめる。
- ・特別支援を要する子供たちに対して、教職員の共通理解を深め、適時適切な対応ができる体制の中で指導に当たる。また、特別支援教育はその子供に応じた個別支援であるという認識の下、一人一人の子供たちに対応していく。

III. 体力の向上に関して。

- ・体のたくましさは、丈夫な体作りが元になる。学校に休まず登校し、様々な活動に進んで取り組める基礎的な体力をきちんと身に付けた子供たちを育てる。そのために、体育学習を充実させるとともに、短縄、長縄8の字跳び、水泳、マラソン等を年間を通した取り組みとし、全校が一体となって子供たちの体力向上を図る。
- ・学年の実態に応じたためあて学習をすすめ、活動量豊かな体育学習を工夫する。運動好きな子供を育てるとともに、子供一人一人の日常生活に生きる体力向上を図る。
- ・自ら体を動かすことをいとわず、休み時間等に外で遊び汗をかく日常をつくる。運動遊びや食べることに對して、前向きに取り組む態度を育てる。
- ・偏食のない食生活につながる食育を推進し、食べることに抵抗感のない子供を育てるとともに、年間を通して各学級の給食残菜ゼロをめざす。また、学校の年間残菜率を5%以下にするように全校で取り組む。
- ・寒暖にまけない体づくりにかかわる生活習慣を確立させ、年間を通して薄着の生活を奨励する。また、子供たちの心身の成長につながる睡眠については、現実的な改善を図るように学校から発信を続けるなど、保護者への啓発と連携した取り組みを推し進める。
- ・学校として、子供たちの病気や怪我、心身の不調などを適切に把握していくことを心がける。その上で、子供自身に自らの心身をコントロールしていける実践力を身に付けるようにし、過度に保健室を頼ることなく生活していけるよう指導していく。

IV. 集団作りに関して

- ・子供一人一人が、自ら所属する学級への愛着をもち、所属感を高める学級経営、専科経営を進める。子供たちに所属する学年学級へのプライドをもつように指導し、「自分のクラスが一番いい」と発する子供がたくさんいる学級をめざす。
- ・子供同士が親身にに関わり合い、本音で意見を交わし合うことのできる支持的風土(共感的風土)の学級づくりを進める。そして、安心感のある集団生活の中で一人一人の子供が存分に能力を発揮できる学級・学校としていく。
- ・全学年毎年クラス替えを受けて、一年間で学級づくりを進められる担任としての手腕力量を身につける。すべてのクラスが、「クラス替えをしたくない」という子供たちの声に包まれて、修了式を迎えられるようにする。
- ・友達的心情や周囲の状況を敏感に察知し、互いに気遣いのできる態度を育てる。特に、いじめにつながる言動については、教師のアンテナを高くし適切な対応をするとともに、子供自身にもいじめを許さない態度を育てていく。
- ・いじめ、不登校をゼロにする。声にならない声を聞き、伝えたい思いをしっかり受け止め、予防的な対応を十分行うようにする。いじめや不登校が現実起こった時は、子供の気持ちに寄り添うとともに、保護者と緊密に連携して教職員が一丸となって対応する。また、いじめに対する生活指導を徹底した上で、自らを奮い立たせて対応するたくましさをも身につける指導も併せて進めていく。
- ・たてわり活動を中心にした異学年交流の場を意図的・計画的に設定し、話し合いや様々な活動を通して子供同士の良好な関係づくりを進める。

V. 保護者・地域との協働に関して

- ・地域運営学校(コミュニティスクール)のよさを生かし、地域力を活用した学習を構築し展開する。地域を招き入れるだけでなく、子供たちが地域の課題に積極的にかかわっての学びを求めていくなど、連携を積極的に図る学校としていく。
- ・CS、支援本部、PTAが協働して教育活動を支える体制をさらに強固にするため、教職員一人一人も保護者・地域との関わりを広げ、深める。保護者・地域の教育活動への参画意識を高め、多くの大人が本校にかかわる体制をさらに確固たるものにしていく。CS会議には毎回各学年代表1名が参加し、子供たちの現状についてありのままの報告をしてもらいたい。

- ・小学校に対する保護者・地域の意識や感覚をさらに醸成するために、子供を中心にした教育活動をすすめる学校の考え方を適時適切に伝えていく。「我が子が学校に毎日通うことは、当たり前である」と考える保護者に囲まれた環境を構築する。
- ・教育調査や行事アンケート等の学校に対する評価を真摯に受け止め、具体的な改善策を検討して次年度に生かすようにする。
- ・ももご教室への理解啓発をすべての保護者に促す。併せて、各学級にいる個別の支援を必要とする子供たちに対する深い理解と支援活動への協力を、様々な機会を通してお願いしていく。

VI. 教師の指導力の向上に関して

- ・子供たちが「教師の鏡」である。よく笑う担任の下で、よく笑う子供が育つ。しっかり食べる教師のクラスは子供も食べる。教師がいつも小言を言っている学級の子は、友達に注意や文句をたくさん言い始める。「子供は、育てたようにしか育たない」子供の姿から、自らの指導を見つめ振り返る習慣をつける。
- ・教師としての確固たる授業力を身につけ、自信をもって指導できる教科・領域を増やすために、研究・研修には貪欲に関わる。教師自らが学ぶ意欲をもち、切磋琢磨する組織の中で教師力を向上させる。教師が心しなくてはいけない格言。「学ぶことを止めた指導者は、教えるはいけない」
- ・子供たちと「共に遊ぶ、共に食べる、共に働く」を日常的に進める。子供一人一人を深く理解し、寄り添える教師をめざす。子供との信頼関係を抜きに、良い指導、良い授業、よい学級はできないと認識していく。
- ・体罰厳禁。「体罰は、指導者としての敗北」として、体罰によらない指導力をつける。同時に、教師として子供たちに対する暴言も慎む。恐怖や威圧ではなく、子供の内発的な動機付けを大事にした指導を心掛け、子供たち・保護者からの信頼を得る中で教育活動を実践していく。
- ・OJTを教職員が一体となって進め、授業を互いに見合うことを当たり前にしていく。日常的に学ぶことを自ら求め、指導力を高め続ける教師をめざす。
- ・専門性を磨き、自己申告における目標設定を現実的かつ発展的な内容にし、前向きに取り組む。外部の研究団体に進んで参加し、教員としての指導力向上に努める。
- ・週案をはじめとした丁寧な準備をして授業に臨む。週案は、月曜日朝の提出。週案のコメント欄を通して、日常的な悩みや愚痴を遠慮なく校長に伝え、喜ぶべき成果は共有を図る。

VII. その他、教育活動全体に関して

- ・「教育は人なり」を真摯に受け止め、自ら選んだ職に対して誠実に取り組む。人を育てるといふ崇高な営みに直接関わっていることを心の拠り所にして、自らを高める努力を継続していく。
- ・教育の成果を早急に求めない。「漁師は山に木を植える」のごとく、今日の指導がいつか役立つという大らかな姿勢で子供たちと対面していく。目の前をきれいに整えようとすると、「子供たちにやらせる指導」が多くなる。子供自身が考え、行動し、失敗や間違いも体験させ、小学校時代の経験を豊かにする学校としていく。
- ・「倉の内の財は朽つることあり 身の内の財は朽つることなし」（江戸時代の寺小屋の教科書であった実語教から）身についた知や徳、そういった教育の成果は決してなくならないことを説いている。学んだことはなくならない。これまでも、これからも。そこに携わる私たちは、教師としての使命を自覚し、自らの力をつけることにこだわっていきたい。
- ・初任者2名の指導を全教職員であたる。初任者にとって、教師としての多様な学びを得られる一年になるようにし、初任者自身が桃五でのスタートが幸運であったと

感じる一年としていく。併せて、本校が初任校となる若手教員を育て、子供たちへの指導を自信をもって進めることのできる手腕力量を身に付けさせる。

- ・教育公務員としてサービスの厳正に努める。サービスとは「やらなくてはいけないことはやり、やってはいけないことはやらない」ということ。当たり前のことを当たり前に行い、職務に専念する。
- ・学校の基本的な立ち位置として、「学校は、間違ふところである」を徹底する。正解だけを求めたり、失敗を恐れて挑戦しなかつたりといった防衛的な思考にさせない指導を根気よく続ける。また、間違いや失敗、うまくいかない体験を通して、原因を振り返った後に次に向かう意欲と行動力をもたすことのできる指導を心がける。
- ・授業の板書、学校から発信するプリント・通信、通知表などの文言を正しく使用する。特に、将来にわたって各家庭で保管されるであろう通知表については、文意が通り、誤字脱字のない文書を基準として丁寧に作成する。各自からの起案については、事案決定の手順に沿って、担当上司を経由したのち管理職に提出する。若干の時間の余裕を見越して、起案していく。
- ・保護者からの電話や連絡帳での訴えに対して、「わが子のこと」として捉え、管理職への報告とともに、初期対応を迅速かつ的確に進める。「ほう・れん・そう」は、确实迅速に基本。
- ・担当分掌において企画・実践できる力量を身につける。「できない理由」を言う前に「できる策」を考えて、組織を動かす。「去年通り」という言葉を使わずに済むように、プラスワンの工夫を常に意識して職務に当たる。
- ・教師としての姿は、子供たちにとって最大の教育環境と認識する。言葉遣い、身だしなみなど、子供たちにとってよいモデルになるよう努める。また、学ぶ環境としての教室は常に整理整頓された状態をつくるとともに、職員室においても互いが気持ちよく職務に当たれるように、机上机下の整理を当たり前に行う。
- ・教職員の働き方を見直し、健全な社会生活を営む大人が子供たちの教育に携わっているという意識で職務に当たる。学校在校時間を教職員一人一人が自ら管理するとともに、学校全体として8時最終退勤、週1日は6時までに退勤する日を学年で設定するなどし、确实な取り組みとしていく。
- ・教職員スポーツ大会に進んで参加・応援に加わり、チーム桃五の一員として温かき深い関わり合いを築く。
- ・桃五で教師人生の一時期を過ごしたことを良縁ととらえていけるように、仕事については真剣で、厳しく、切磋琢磨していく。教員としての生活は明るく、楽しく、元気でユーモアのある日常とし、メリハリのある教育組織にしていく。教職員がまとまっている学校で、子供たちを育てる。

◎令和3年度における特に留意すべき点

- 新型コロナウイルス感染症の拡大を防止することが、今年度も大きな課題となる。同時に、小学校としての学びがコロナによって大きく削がれようにするために、教育活動を工夫改善していく。できること、できる策を考えて、子供たちにとっての今年度が充実するように総力で教育課程を進めていく。
- 一人一台のタブレットを活用した学びについて、1年をかけて試行していく。毎日の学習で使用するとともに、家庭での学びにおいても活用する機会を創る。今年度は長い準備期間と位置づけ、令和4年度には年度当初から様々な学習で活用できるようにする。タブレットを筆箱と同じように学校生活に必要な道具の一つにしていくことをめざす。
- 教育目標の重点「たくましく」を意識した教育活動を展開し、子供たちのたくましさを高めるために運動、生活、食育、環境整備などにおいて様々な方策を講じていく。全校欠席者のゼロの日が実現できることをめざす。
- 子供に任せること、子供自身が決めいくことを可能な限り増やし、子供たちにボールを持たせる指導を心掛ける。ボールを持たせる以上、事前の計画・準備は周到に進めなければならない。
- 初任者2名、2年次2名、3年次4名をはじめ、本校を初任校とする若手教員の実力を高めるため、チーム桃五として教育熱のあふれる日常を創る。言葉として伝えるだけでなく、教育への姿勢、姿をもって若手を育てていく。
- 専科の先生方を各学年に副担任として配置し、チーム〇年として子供たちをより多くの教員の目でみていく体制にする。大前提としては、全教職員で全校の子供たちを見ることであり、担当を具体的に示し緩やかなまとまりをもって教育活動を進める。新たな体制によって、これまで以上に学校の凝集性が高まり、子供たちへの教育活動が充実することを期待している。
- 健康な心身で児童の前に立てる教職員であるため、働き方の工夫や休暇の取得をすすめる。新たなシステムである出退勤記録に自分の記録を確実に残すとともに、校内在校時間を自ら管理するように心がける。学校としての目標である遅くても8時退勤を守り、明日も元気に子供たちの前に立つ教員であり続ける。